程を概觀し得又一種の書史として見ることも出來る。卷末二十頁の索引もその辭書的效果を助くる事が少くない。（菊判三三三頁　東京中文館書店發行　定價三、〇〇）

●明治維新神佛分離史料續篇上卷　村上專精　辻善之助　尾鷲順敬　共編

先に出版せられた上中下三卷のいはゞ正篇に引續いてこゝに續篇の上卷が世上に送られた。編纂の體裁は正篇に同じく地方別に史料を配列し所々に圖版を挿入してゐる。內容の主なるものには東京淺草寺常陸筑波神社、讃岐琴平神社、豐前宇佐八幡宮等の神佛分離史料、信濃松本藩廢寺の件石見濱田領內神職神葬祭願一件、白峰寺廢寺並復興始末、香椎宮に於ける神官と社僧の軋轢、二荒山神社並東照宮及滿願寺處分の件、鹿兒島藩廢寺廢佛並に復興史料等がある。

本書も亦維新改革に從つて起つた種々なる社會相をそこに歷々指摘し得るものがあり興味一方ならざるを覺える。續篇は上下二卷を以て完成する筈である。（菊判一、一四二頁、圖版十葉、東京東方書院發行、定價下卷共二四、〇〇）〔以上肥後〕

●春日神社文書　春日神社々務所

春日神社は古來藤原氏との由緣深く、從つて國史と少からざる關係を有し、而も傳藏する貴重なる古文書の豐富なる點は本邦神社中の一二に位するものである。此度京都帝國大學助教授中村直勝氏編纂の下にこれ等が公刊されることゝなつたのは學界の爲め歡喜に堪えぬ事である。

本書は資料として、本社が名にし負ふ大社であり且つ神領が諸國に存在して居つたから、政治、經濟、社會、其他諸方面に多大の關係を有し、特に本社關係の關所料海陸交通の發達、社寺領制度、神木動座等の史料は夥しく含まれて居つて、啻に神祇史、古文書學上に於てのみならず廣く國史の研究上、貴重な資料を提供する。その編纂方法には最も意を用ひて、各文書に料紙名及び形狀を注し、別に人名地名件名等の詳細なる索引を附してある等從來の此種のものよりも數歩を進めたものである。本書は古文書の第一卷で、之より順次古文書古記錄が公刊されるとのことであるが、吾人は其の完成の速かなら

んことを切望する。（菊判本文七七七頁、附錄四九頁、圖版三〇餘枚、奈良春日神社々務所發行、價九、〇〇圓）

●蓮如上人行實　稻葉　昌丸編

蓮如上人の言行を集錄したものは種々の名稱を附せられて世に多く存し、中には其の性質の判明せぬものもあつて、世人をして取捨に迷はしめる事が多いのであるが、編者はそれらの諸記を一々對比して其の性質系統を考究し其の結果を大正八年中に雜誌『無盡燈』に發表されたが、此度その結論に基きて最も信據するに足ると思はれる記錄を撰擇して本書を刊行し、それに實悟所編の日野一流系圖及び下間家系圖の主要部を多少變形して加へ、尙ほ參考として『無盡燈』に揭載された編者の諸論文及び詳細なる索引が附してある。所收の記錄は空善記（附兄弟中申定）條、連淳記、實悟舊記、實悟記、本願寺作法之次第（附山科御々坊事並其時代之事）　昔物語記、榮玄記、の八部で、各々諸本によつて校合し、異同を注記してある。由來此種のものには僞作したり故意に字句を改竄する者が少からずあつて、後代人の研究を大に妨げるものであるが、本書の如き眞

摯なる研究によつて夫等諸本の善惡を簡別して世に示されることは誠に喜ばしい事で、本書は蓮如上人に就て研究を爲さんとする人々の座右に、闕くべからざるものである。（菊判四二三頁、京都大谷大學出版部發行、價四圓）

●近世日本演劇の源流　原田　亨一著

本書は近世日本演劇の源流としての阿國歌舞伎に就て研究したもので、先づ日本演劇の大觀、阿國歌舞伎に至る日本演劇の變遷を述べ、次に中世末期より近世初頭にかけての音樂舞踊の民衆化といふ新しい雰圍氣中に阿國歌舞伎が起つて來たのであつて、從來阿國に就て二代說三代說を主張する人があるが、之は阿國歌舞伎を以て女歌舞伎を指す普通名詞と考へず固有名詞と考へた結果で、阿國歌舞伎の起源は文祿年間或は慶長の初期に置くを至當とすると述べ、次に阿國歌舞伎の內容と發展、阿國歌舞伎と遊女歌舞伎等に就て觀察してある。從來歌舞伎劇を史的に研究した論著は殆んど無かつたと云つてよいのであるが、本書は著者が深き興味を以てこの方面の開拓を試みられた第一步として世に出されたもので、

吾等は著者が更に研究の歩を進められ、早く大成されん事を切望する。（菊判四三六頁、東京至文堂發行、價三、二〇）

●滋賀縣史　滋賀縣編

滋賀縣卽ち近江國は其の疆域畿內に接し景行天智兩天皇の御遷都を始め、古來皇室との關係特に深きは勿論、政治、經濟、宗教、學術方面に於ても國史上極めて重要な地位を占めてゐる。されば本縣は早く大正七年より縣史編纂の議を起し、三浦文學博士を顧問とし、さきに福井縣史を編纂した牧野信之助氏を編纂主任として大正九年より編纂に着手し、滿八年を經てこゝに其の完成を見るに至つた。全部は六卷より成り、第一卷概說、第二卷本編一（上代—中世）、第三卷同二（中世—近世）、第四卷同三（最近世）索引、第五卷參照史料、第六卷附圖とし、全せて三千頁に垂んとする浩瀚なものである。本編三卷は本縣史の主體をなすもので、廣汎の範圍に蒐集した史料によつて極めて詳細に本縣に於ける古來の史實、文化の推移を叙述してある。その第一卷は全卷の概說に當るもので、本編を精讀する時間を有せぬ人々に能く縣史の大綱を了解せしめるやうにしてあるのは從來の諸縣史に見ないところで、編者の周到なる用意の程が喜ばしい。本書を繙くことによつて當に縣民が鄕土開發の源委を極め特色ある文化の推移を明かにし得るに止まらず一般國史の學徒も裨益を蒙ること鮮少であるまい。（菊判二千九百餘頁、滋賀縣發行）

●島根縣史七　京極大內時代　尼子毛利時代上

本書は島根縣に關係深き京極大內尼子毛利四家の興亡を叙したもので室町時代の初期より戰國時代に及ぶ國家的にも社會的にも極めて複雜なる時代の事に係る。其の編纂には野津左馬之助氏專ら當たり、尼子宗家佐々木寅介氏所藏の京極文書二百餘通及び其他の資料を基として四家の史實を根本的に調査して之を詳細に叙述してあつて、篇中にはそれらの古文書を多數に引用し、同事件に關する同性質の文書をも悉く併載して事實を明確ならしめんと努めてあるのは多とすべきである。其の一々の篇目はこゝには省略するが、紛糾を極めた當時に於て四家

が交々如何に對處し如何に進退したかを明かにしてあつて、これら諸家の盛衰興亡の跡を知らんとする人々にとつては絶好の參考書と成るものである。（菊判八三一頁、圖版二十數葉、島根縣發行）

●東北文化研究　第一卷第一號

本誌の創刊號が九月一日を以て愈々發行された。卷頭には喜田博士の發行の趣旨、次に同博士の「東北文化研究の必要と其の興味」「東北民族研究序論…歴史家の觀たる我が民族觀―」、があつて、東北民族の研究は我が國史の根幹をなす日本民族の成立、日本國家發展の事情を明かにする上に最も重要な地位を占める事を述べてある。其他同博士の「日高見國の研究」を始め、岩手縣最初の古墳發掘記錄（小笠原謙吉）、末の松山傳說（齋藤忠）、菅江眞澄翁（深澤多市）、オシラ神に就ての小報告（佐々木喜善）、秀吉奥州征伐に關する伊達政宗の書簡に就て（中瀨武）、青森縣上北郡先住民族分布狀態（成田券治）、平泉毛越寺境内摩多羅神の行事（室谷精四郎）、秋田地方發見木製屐に就いて（武藤一郎）、朝日岳の話（伊東信雄）の諸編、及び喜田博士の學窓日誌があり、其他彙報、餘白錄等記事豊富にして挿圖も多く、東北文化を研究せんとする人々にとつては、絶好の參考雜誌となるであらう。吾人は本誌の發刊を喜ぶと共に衷心から其の前途を祝福する。（一二〇頁、東京史誌出版社發行、價五〇錢）〔以上松野〕

●ギリシヤ史研究　原隨園著

「事實を事實として眞相を探求する事と、事實を發展の相に於て觀察する事とは、人間の本性に根ざす強い要求であつて、この二つの要求に刺戟されて歴史は發生するのである。」本書の前半をなす五章は著者のかゝる考の下に行はれたギリシヤ史學史に關する研究を集めたものである。而して著者はホメロス及びヘシオドスに素朴なる上記の歴史的精神をみとめ是を以てギリシヤ史學の曙光と見て居る。これはホメロスツクユデデスよりヘロドトスに至り、更にポリユビオスの史風にも筆を及ぼし史學思想をたづね以て一貫したギリシヤ史學史を形づくつて居るのである。尙是等の歴史家が一箇の絶對的威力たる